

# 遠藤周作論

中野 恵海

## 一、処女作「アデンまで」

年譜（集英社版・新日本文学全集・巻末）によれば遠藤は大正十二年（一九二二）三月、東京生れであるから本年（昭・四三年）数え四十六歳である。大正十五年（四歳）家族と共に大連に移住したが約六年後の昭和八年（十一歳）日本に戻り、神戸市六甲小学校に転校している。後年の作品「船を見に行こう」（小説中央公論・昭三五・三八歳）「童話」（群像・昭三八・四十一歳）などは彼の幼年時代の在満中の体験がもとになっていると思われる。そこには多分に誇張・歪曲があるにせよ、これ等の作品の基調は暗く陰惨で、彼が後に、好んで、背徳、偽瞞、変態、挫折、など人間性の弱点や暗黒面を題材に取りあげている事と一脈通ずるものがある。

神戸に来て彼は伯母の言いつけで、カトリック教会に行き、洗礼をうけている。当時少年の彼にキリスト教の神を求める熱烈な心などあ

った訳でなく、全く無自覚な偶然の出来事のようにあつたろうと思われる。小説「私のもの」（群像・昭三八・四十一歳）にこの辺の彼の心が語られている。

昭和二十年（二十三歳）八月の終戦後、彼は慶応大学仏文科に進学した。仏文科を志望したのは、佐藤朔の「フランス文学の潮流」を読んだ事が動機であつたが、これが彼の文学開眼となつた。そしてモウリヤック、ベルナノスなどの現代仏蘭西カトリック文学を読みはじめる事になつたのである。

彼が、ものを書き出したのは小説ではなく評論であつて、大学三年の時、「神々と神」（角川書店・四季）つづいて「堀辰雄覚書」（高原）がその最初で、何れも神西清の推薦であつた。大学卒業後、出版社「鎌倉文庫」に入社、「三田文学」に「カトリック作家の問題」を発表。ここで、丸岡明、原民喜、山本健吉、柴田鍊三郎、堀田善衛、など三田文学の先輩を知つたのであつた。「武田泰淳論」（個性）その他を書いたが、鎌倉文庫が営業不振になつた。

昭和二十五年（二十八歳）七月、カトリック留学生として仏蘭西現代カトリック文学の勉強のため、仏国船マルセイユース母の四等船客として渡仏し、リヨン大学に学びつゝ、モウリックを熟読した。とくに「テレーズ・デケルウ」は幾度も読んだという。彼は「リヨンの二ヶ年半の生活はいささか苦しかったが、小説家になろうとしたのはこの時なり」と書いている。

二年半のリヨン生活の後、昭和二十八年（三十一歳）帰国して「クリテイク・メタフィジイ」批評を「文学界」に連載したり、同誌に「基督教と文学」を発表したりしたが、フランスよりの帰国を題材にした「アデンまで」を「三田文学」に発表した。これが彼の小説の処女作である。昭和二十九年、彼は三十二歳であった。

小説「アデンまで」は一人称告白体で書かれている。私小説風のこのスタイルは遠藤の好んで採用する表現形式の様で、他に「白い人」とか「海と毒藻」とか、或は短編小説集「哀歌」中のいくつかの作品がこの形式である。今「アデンまで」を批評・鑑賞するに先立って、この作品の特殊な構成について述べてみたい。というのは、現在ストーリーが進行しつつある場面に、密着させて過去の或る場面が織りまぜられてゆくという構成で、之は「哀歌」中の短編「その前日」「四十歳の男」「大部屋」でも踏襲されている。現在の描写の中に過去の回想が這入るといふのは珍らしい事でも何でもないのだが遠藤のは、回想のさしはさみ方が独自である。前言の如く一つの場面の描写があって、それにつづいて過去の回想があり、又現在描写があり、それに密着して過去の回想があるという風にして、物語の終るまでそれが続

くのである。これは明らかに遠藤によって考え出された独自の方法で、テーマを生々しくする為、或は現在の場面の印象を強めたり、それを印影深くする為に精細に計算された一つの構成方式であると考えられる。「アデン」のストーリーやテーマに触れる前に、多少、煩瑣のきらいがあるが、ストーリーの展開を個条書きにして見てゆきたい。

1、俺がヨーロッパを去る時、愛人のフランス女が送って来た。港の船の前で握手して別れる。船は三、四千トンの老朽貨物船で、与えられた四等船室は船倉であって、同室者は病人の黒人の女一人である。——ふと巴里のことが回想される。

(一) 巴里のこと、別れた女のことを思い浮かぶ。パリで下宿した隣室の女であったが、最初の接吻の時俺は「いいのか、本当に俺でいいのか」と叫んだ。人種がみな同じであるならば「なぜその時、俺はこのようなみじめな呻きを洩らしたのだろう。愛情が人種や国境を越えるものならば、つかの間でもあれ、自信をもっても良かった筈である。その時俺はこの呻きの内側にひそむ、ある真実を本能的に直視しまいとした。」

2、マクロニシ島は水平線のむこうに影を消してゆく、俺はギリシヤの島の峰の残雪を憶えている。——残雪。

(二) あの日も雪が降っていた。二人はリヨンに来た。ホテルの夜、鏡に映した二人の裸体からいいようのない劣等感を覚えた。女の白い肉体の輝きに対して、黄色の俺はまさに醜悪だった。俺はそこに、

真白な葩にしがみついた黄土色の地虫を連想した。その色自体も胆汗やその他の人間の分泌物を思い浮ばせた。

3、出発以来黒人女は、あおむけに横たわったままである。「俺は真からその肌の色が醜いと思う。黒色は醜い、そして黄濁した色はさらに醜いである」、「確かなこと、それは如何に口惜しくても、肉体という点では永久に俺や黒人は白い皮膚をもった人間たちのままでミジメさ、劣等感を忘れることはできぬという」ことだ。

② 雪の夜の翌日。偶然女の友人達に逢う。「愛だけでは充分ではない」「愛だけでは女は黄色人にもなれず、俺は白色人にもなれなかった。愛や理窟や主義だけでは、肌と肌の色の違いは消すことは出ななかった」俺は一人の青年の、俺に対する憐憫と同情を傷つけたい衝動にかられた。「お前は印度支那の女と婚約はしない。決してできないだろう。」心の中でなにかドス黒いものが泡だち、それは陰險な音を立てて胸の中を泡吹いていった。

4、夕暮になって、やっと白人の船医が看護婦のかわりの中年の修道女を連れて船倉に來た。素直に診察させない黒人女を医者は撲る。女は罰を受けた家畜さながらにおとなしくなる。女は「黄胆」らしい。二人は去る。女はつぶやく「このままでいいだ。黒人はみな、このままでいいだ」

④ 一昨々年、まだ女と会わなかった頃、友人と淫売窟に行ったことがある。黒人の淫売婦が白人の淫売婦から報酬を四分ノ一しか分け

てもらえなかった。そして自ら、あきらめきった調子で、「黒人だもん」と答えたあの女たちにとって皮膚が黒いというのは単に黒いということではない。黒は夷に、罪の色なのである。

リヨンから巴里に帰って、性の悦楽にうたれて女は叫ぶ「貴方は私の奴れいよ。奴れいになって」その時俺の感覚の中に、或る快感が——決して日本の女とは味わったことのない——疼いた。それは単なるマゾシズムの被虐の快楽ではない。おそらく、その背後には白色の前に黄いろい自分を侮辱しようとする自虐感、その悦びがひそんでいた。

5、葉を飲ませようとして俺は白人の医者がした如く黒人の女を打つ。なぜかわからぬが。夜になって黒人女は隔離室に入れられる。朝方、船はスエズ運河に這入る。運河をはさんで茶褐色の砂漠があらわれはじめる。そこで一度だけ見た一匹の駱駝の姿は胸をしめつける。——歴史もない、時間もない、動きもない、人間の営みを全く拒んだ無感動な砂のなかを一匹の駱駝が地平線にむかって歩いてる風景、それがたまらぬ郷愁をおこさせる。

黒人女は死んで水葬される。この無感動な無表情な海に葬られる。白人の祈禱は俺の耳には無意味な音おととしか聞えない。ただ知っているのは黒人の女は、いまは、もうそれら白人の白い世界とは無縁のものであり、死の後にも裁きも悦びも、苦しみもないこの大いなる砂漠と海との一点となることだけであった。

個条書きにして明らかとなった様に、1、2、3、4、5、は現在の物語であり、(一)、(二)、(三)、(四)、は夫々に密着された回想部分である。この独立した二つの物語が、バラバラにされて、現在の物語を心に再構成されているところにこの構成方式の特異性がある。1と(一)への連続は「ふと巴里のことを回想した」為であり、2から(二)へは「残雪」がそれをつないでいるが、3から(三)へは表面的には書かれていず、ひどくぶっさら棒の様であるが、これは「黄色の肌色のもつ劣等感」がそれであり、4から(四)へも、明らかに「黒人の劣等感」がそれをつなぐ。(二)の初めの部分が「あの日も雪が降っていた」というのに対して(三)が「雪の夜の翌日」と始められるのは、この間に3がはさまっているだけで、(二)(三)の連続がきわめて密接で、従来の手法の様な、現在の物語の中にとどころ回想が這入るといふ風なものとは構成が根本的に違う。前言した如く「四十歳の男」や「大部屋」に於てはいよいよこの事がはつきりするのだが、この方式は或は映画を連想させる。こと程左様に、物語が二重映しの様にもなり、回想の部分が現在の物語と殆んど同じ比重を持つ程生々しくなるのである。或は又、この回想の部分が作用して、物語られている現在の描写が甚だ印影深くなる。奥行きが深くなるのである。そしてこの構成方式は甚だしく知的操作を必要とすると考えられるが、ここに一つの遠藤の文学の特質がある様に、私には考えられる。

さて、この物語のストーリーはひどく簡単である。即ち、ヨーロッパを去ろうとして、巴里の下宿の隣室の女で愛人だったフランスの女性に見送られて、ひどく老朽した貨物船に乗り込んだ日本の一人の青年

が、船倉で一緒になった病気の黒人の女を見て、肌の色の違いについて、白色人に対する有色人種の絶望的な劣等感におち込む。愛人の女にからまる肌色の違いを中心とした回想がそれに重ねられる。間もなく黒人の女は、まるで一個の品物の如く、無雑作に海に棄てられる。白人達の祈禱はこの時、殆んど意味のない音としか聞えて来なかった。

一編の主題はひどく大きな問題をふくみ、又断片的な、途方もない様なものでもあるが、人間の肌の色は決定的で、白色人は美しく、正しく立派で、黒人はみにくく汚く劣等で邪悪であり、中間色の黄色人は穢くみじめで悲しく、この劣等感から永遠に脱し切れない。そして白色人の救い、白色人の宗教も、黒色人や黄色人にとっては無縁なのではないかと言う問いが提出されている。その様に私には解される。

数々の評論その他で磨かれた三十二歳の遠藤の筆は達者で、初めから完成されている。リアリズムを基調とするものだが、譬えば作品の最後の部分「アフリカの太陽は東からこの海を押しつけていた」の様な横光利一式の新感覚派的な表現がこれに混る。そして肌の色に絶望的な劣等感と自虐的自嘲に沈湎する黄色人種の憂鬱な感慨が、印象的に、唄うが如く、つぶやく如く、叙される。そのテーマは前言した如くであるけれども、作品中に出て来る風景の一つに、アフリカ大陸とアラビアとはさまれたスエズ運河の両側の砂漠の描写があつて作者の主張を暗示する。即ち、歴史もない、時間もない、動きもない、人間の営みを全く拒んだ無感動な砂のなかを一匹の駱駝が地平線に向つ

て歩いている姿がそれだ。この痛烈な風景が作者に、ままならぬ郷愁をおこさせるのであり、何故か解らぬながらこの郷愁こそが、黄色人種の男の郷愁なのだ。自ら断定している。この場合、砂漠と決定的運命的な肌の色とは、この小説に、絶望の人生の設定を感じさせるだろう。どうにもならぬ人生というのがこの作者の作品の態度である。そしてそれは、決して逃れる事の出来ぬ人間の罪を想わせるものであり、「黒は罪の色なのである」との断定がそれにつづく。人間の恥部をえぐり出し、罪の沼に沈もうとする作者の人生態度に、これは発している。モーリヤックと同じカソリック作家としての、これは遠藤の小説作法である。くり返し言うならば、「黒は罪の色である」という断定も、これは決して、所謂人種問題に關しての思想や発言ではない。黒は罪の色、黄色は悲哀の色、というふうにもならぬ絶望感に沈まざるを得ない一黄色人の青年を通して、あの砂漠をゆく駱駝に象徴されている孤独感、絶望感、その人生的感慨を叙すことに重点がある、と考えられる。我々はここでこの作品の終末の部分に注目したい。死んだ黒人の女がもう白い世界とは無縁であると述べ、「死の後にも裁きも悦びもない」と叙しているのはどういう意味であろうか。裁きも悦びもないというのは、キリスト教の救済とは無縁であると言う意味である。その理由は何か。黒や黄色は生得的に、汚濁と罪惡にまみれているからと言う意味なのか。そんな宗教があるか、と我々は反問する。汚濁と罪惡とに深くかかわってくるものをこそ宗教と呼ぶのである。ここでも、これは、絶望感、劣等感に沈溺する青年の姿を提示する事にこの作品の意味があるのだと考えられる。

唯、キリスト教と日本人との關係に於て、日本人にはキリスト教を受け入れぬ本質的な何かがあるのでないか、という事に関しては後年の大作「沈黙」があるのであって、「アデン」ではその萌芽が認められるとは言えそうである。

## 二、「白い人」と「海と毒薬」と「火山」

「アデンまで」を発表した翌年、昭和三十年（三十三歳）に「白い人」が「近代文学」に発表された。そして、第三十三回芥川賞を受けた。二年後の昭和三十二年（三十五歳）には「海と毒薬」が「文学界」に連載され、これは、新潮賞と毎日出版文化賞をうけ、翌々三十四年（三十七歳）には、新境地を展開したと言われる「火山」を「文学界」に連載した。この処女作以来の五年間の彼の活躍ぶりは誠に目覚ましいものがあり、文壇デビュー以後急激にその文壇的地位を獲得して行った姿が見られる。

小説「白い人」は、悪魔的立場（それは或はユダ的立場と呼ぶべきかも知れない）に立って、キリスト教とその殉教者の奥にひそむ偽善を剔抉しようとする姿勢が露骨に感じられる。陽の当る場処に生きるには余りにも深い、決定的な傷を背負われた青年が主人公として登場する。この作品には、現実の人間行為のみにくさ、と言うよりは人間の本質が悪そのものだという思いが深々とたたよっている。キリスト教やヒューマニズムなどというもの、その上に立つ文化そのものも究局の場に於て、人間地獄の極点に於ては物の役には立たないので

ないかという痛烈な叫びのつき上げて来る作品である。

この作品の主人公に決定的な傷痕をのこしたのは十二歳の春も終りの日のこと。病気で学校を休んだ彼が退屈のままに二階のベッドから外を眺めていた時、不思議な光景をみた。家の女中のイボンヌが病犬の首をその白い太い腿で押えつけて烈しく撲りつけている光景である。

恐らくは彼女は家から肉片をぬすんだこの老犬に復讐のおしおきをしたのだと思われるが、この時のふるえは恐怖のためではなく、放蕩児の夫を持った可哀想な母が息子に強い純潔主義の厚い城壁が、その日、音を立てて崩れ落ちた為であった。そしてその時味わったものは、実に情慾の悦びであったのである。この母親からのジャンセニスムの影響で神を見失った青年が悪に陶醉し、サディストとなり、遂に占領下のドイツ軍の秘密警察の手先となり、残虐の限りをつくす。この「松の実町」で行われる拷問の描写は編中の矢張り圧巻であるだろう。そして、何かいまわしい情慾の遊戯を感じさせる様な、サディストの感覚でそれが叙せられている。最後に、かつての大学の学友神学生ジャックがマキの一味として拷問を受ける。容易に口を割らないジャックを責める為に彼の愛人マリーテレーズをその面前で凌辱しようとするが、ジャックは舌を噛み、マリーは発狂する。

心に消えぬ傷を持つ主人公はユダに成ろうとする様である。ユダから見れば、世のあらゆる殉教者の心の中には英雄主義への憧れ、自己犠牲の陶醉がある。彼の加虐行為はこれに向ってなされる。彼が踏みつけ、撲り、呪い、復讐しているのは、すべて幻影を抱いて生れ、幻影を抱いて死ぬ人間に対してである。幻影とはこの場合、まやかしの

信仰、人間悪に気付かぬ軽薄、うわべの善行、等を指すであろう。ジャックの自殺とマリーの発狂によってこのユダは勝利を得る事は出来ない。では、この小説は神学生ジャックの勝利をうたったものなのか、否である。如何ともなし難い人間の救われようのなさをこの作品は訴えている。

「海と毒薬」は戦争末期に九州大学の医学部で行なわれた米人捕虜に対する生体解剖事件を題材とし、日本人における「罪の意識」の不在の無気味さを追求したものである。そして結論するところ、神を知らないことがその原因ではないかと問うているものようである。テーマはまさにこの一点にしばられていると考えられる。生体解剖に係する医師、助手、看護婦達の姿を、この人達の生い立ち、環境、性格、この時の夫々の心理まで、鋭く、詳細に追求して、それこそ医師のカルテの如く読者の前に展示しようとする。

この人達の中で特に勝呂という、当時助手だった人物に特にスポットがあてられている。序章に当るところの変人の医師の姿が、この生体解剖を体験した後の勝呂の、罪に打ちひしがれた姿が描かれている訳であり、このいわくあり気な彼の秘密が次第に明かされてゆくという風に小説が書き進められてゆく。そしてこのショックな手術中の描写が主として勝呂助手ともう一人の戸田助手の目を通して一元的に描写されている。主として作者は勝呂助手の心にわけ入る事により、この生体解剖の意味を考えようとする。人間行為の中でのこのことともつ意味を追求した、詳細なこれは思考報告である。特に筆がこの犯罪に対する、人の心のおびえと人の心に落すそのかげと、その人

間の、以後の生活に対する影響をみようとする。これらの点に於ける眞実性<sup>リアリティ</sup>如何がこの作品を殺しも生かしもする。又この点にこそ、カソリック作家と呼ばれる遠藤の特異性や独自性がある訳であり、彼の文学の持つ宗教性が最高度に発揮されねばならぬ。遠藤の筆は簡潔にして的確、その場面描写はリアリスティックな迫力に富むもので、特殊な魅力を発揮し、構成も手堅く、力編佳作と呼ぶに価する。勝呂<sup>まさろ</sup>は傷つき易い、ヒューマニスティックな性情の持主で、病院という巨大な機構の非人間性につまづいてばかりいて、次第に陰鬱な性格になってゆく。

看護婦上田は結婚に失敗し、子供に死なれ、再び看護婦になるが、主任教授の妻ドイツ婦人ヒルダのキリスト教的人道主義の、浅薄さ、甘さを偽善、偽瞞と受け取り、全身的に嫌悪と反感をいだく。その衝突が原因して、ひねくれと自嘲との絶望的世界に呻吟する。

戸田助手の幼少年時代の回顧は、するどく、傷ましい。所謂模範生なるものの楽屋裏をあばき、人間の良心のなさを抉る。戸田の反省によれば、良心の呵責とは他人の眼や社会の罰に対する恐怖だけである。欺瞞を醜悪とは感ずるがその為<sup>ため</sup>に苦しむことはない。然し、この戸田の手記を読む読者には鋭く感じられる事だが、戸田が何か不気味なものを感じつつこの手記を書きつけるという事その事が重大ではないか。

——醜悪だと思ふことと苦しむこととは別の問題だ。それならば、なぜこんな手記を今日、ぼくは書いたのだろうか。不気味だからだ。他人の眼や社会の罰だけしか恐れを感じず、それが除かれれば恐れ

も消える自分が不気味になってきたからだ。不気味といえは誇張がある。ふしぎのほうはまだピツタリする。ぼくはあなた達にもききたい。あなた達もやはり、ぼくと同じように一皮むけば、他人の死、他人の苦しみに無感動なのだろうか。多少の悪ならば社会から罰せられない以上はそれほどの後めたさ、恥しきもなく今日まで通してきたのだろうか。そしてある日、そんな自分がふしぎだと感じることがあるだろうか。

この告白はまことに痛烈である。親鸞の告白同様、われ／＼人間は皆この言葉に抗議する事は出来ないのではないか。そして戸田は空襲の夜の闇黒の街空にひびくざわめきを聞いた時、幼時よりの罪の数々が心に一時に蘇ってくるのを感じた。

——なぜかわからない。ぼくはその時、いつかは自分が罰せられるだろう。いつかは自分がそれら半生の報いを受けねばならぬだろうと、はっきり感じたのだった。

これはまたひどく宗教的である。そしてこれはこの作品のテーマに密着したものであると私には思える。生体解剖をめぐって、文明機構の中に於ける「罪の意識」不在を問ひ、ひいては、日本人の精神風土の中に「罪の意識」不在、「神」不在を問う姿勢を持つこの作品に於て、戸田助手の告白は夫等のものをきわ立たせる程、罪の意識の在り方や神の存在へのかかわり方を暗示するものではないだろうか。

尚、この作品は不徹底であるだろう。生体解剖という犯罪を犯かした二人の教授や浅井助手や、この日解剖に立ち会った軍医、軍人達の非人間的姿を描き乍ら、勝呂助手や上田看護婦や、今また戸田助手の

罪につまづく、罪にひしがれる姿を描きすぎるとはいないか。何れにも焦点を置かぬというのであれば話は別だが、この作品では戸田に焦点を当てて、勝呂の後の姿を置く代りに戸田の姿を置いた方が「罪の意識」不在とその問題が、くっきり出たのではないかと思われる。この尽では、「日本人の精神風土」の中の「神」不在を問うたものとしてのテーマが、はっきりしていないと思う。

「火山」は、四十歳台から十五年勤続という事で表彰された気象台の観測課長須田仁平が停年退職する場面から始まる。が、間もなく低血圧病状が起り入院する。同じ病院の隣室にデュランというフランス人が入室している。彼は八年前教会から司祭としての一切の祝福も榮譽も剝奪された棄教者で、彼は自分の古傷に指を入れては「老いぼれ犬が……」と自嘲する事を日課にする様な陰惨な毎日を送っている。病氣になって須田は、自分の周囲を見廻わす。妻と息子と嫁。そして、これ迄一度も愛した事のない如く、自分も又誰からも愛されていない事に気付く。老の悲しみを味わう。

——哀しい山だねえ、火山というものは人間の人生と同じだよ。若い頃は情熱にまかせて火を吹く。熔岩を吐きだす。だが年老いると昔のくらい罪を背負いながらこんなに静まりかえるんだからな。だねえ、人間は火山のようにはいかんよ。俺たちは年をとった時自分の過去をふりかえってそれが間違いだと気がついておねえ。もう人生やりなおす時間がない。老いの悲劇とは結局、それじゃないのかね。

これは彼の尊敬する氷山博士の言葉で、今須田老人の胸に泌みる言

葉である。自分が老いる様に十五年間眺めつづけた赤岳が老いてゆく、という風な感慨が須田老人にあり、今日までの調査は氷山博士の学説の裏付けの集大成の様なものでこの「赤岳の鬼」と言われた須田の信念は、赤岳は老朽火山であり、赤岳は噴火しないと言う事である。

——あのまゝ死なれとつたらな、退職金がそのまゝおれたちの手に残ったと。年寄りはそのやけん好かんたい。たゞ無駄飯ば食うて、皆に嫌がられて生きるとに、御当人は知らんとやけん。

——父さんが倒れた時、ホッとしたとはほんに母さんじゃろうな。ちよっ、厄介者がまた舞い戻ってくさってな。

これが、長男一郎の言葉である。今日まで仁平は、自分が妻子から特に慕われているとは勿論、思っではいなかった。人を愛するとか、人から愛されるという事は年とつた彼にはもう関心のない言葉ではあった。しかし彼は自分が息をひきとる時、妻タカが死水をとり、息子や嫁たちも泪の一つもこぼして自分を悼んでくれるであろうと漠然とは想像していたのである。この事が見事に裏切られる。須田にとつては「赤岳」だけは自分を裏切らない。赤岳は爆発しないという事文が生きる望みになってゆくのである。デュランは違う。彼は司祭職を偽善とみている。そして、日本の風土にはキリスト教を受けつけぬものがあると感じている。

——爆発しなければならぬ。みにくい皺を灰色の山腹にきざんだこの火山が老いていくだけのものならば、一方では人間の世界にはあまりにも苦しい悪がありすぎるのではないか。人間の悪はこの山の



ように古い衰えて消えることはない。

デュランは思う。人間から悪が消えることがないならば、赤岳からも地鳴りと黒い熔岩を吐きだす力が失せるはずはない。彼は心の中で、この山腹の一角に突然真赤な火柱がふきあげ、黄色い煙に包まれた熔岩の大河がにぶい響きを伴いながら、佐藤神父が建てようとする信者達の憩の殿堂「聖テレジャ荘」に押し寄せ呑み込んでしまう事を空想する。

赤岳の様子に不安が感じられた日のことがショックになって、須田は人間関係に絶望し、赤岳の安泰のみを祈りつつ死ぬ。そして或る日デュランは自殺する。

赤岳は遂に静かである。偽善を以て目された佐藤神父も又安泰である。

以上が小説「火山」のストーリーである。そして、テーマは何か。之は例によって明確ではない。私はこの作品には二つの大きな主張があると考える。その一つは、老病におち込んで須田仁平が発見したところのものである。つまり、妻子、といえども、人生に於ける人間関係に於ては真実の愛などというものはないという事である。この意味に於てはデュランの、自嘲的絶望的人生観とは共通点がある。その二は、デュランが鋭く臭ぎとったもので、日本人の精神風土にはキリスト教を受け付けない何物かがある。その何物かの基因は「罪の意識」の不在にありという事ではないかと思われる。それでは「火山」は何を象徴したものであろうか。須田とデュランが共に仰ぎみたもの、それは遂に、不安と不可解とそして強力な第一のもの、つまり現実その

ものではないのか。虚偽と不安とをその底に藏しながら佐藤神父と共に安泰なのがその事を示唆するものようである。

### 三、短編集「哀歌」と「沈黙」

処女作「アデンまで」や「白い人」に見られる特徴のひとつに、サディズムのある事は明白で、前述の「火山」などはその色彩の比較的薄い方の作品ではないかと思われるのであるが、なお棄教司祭デュランの中に、殊に火山の噴火を願う心情の中にそれがうかがえると思われる。遠藤は「火山」発表の年、フランス留学中(約十年前、昭和十五年)より興味をいだいていたマルキ・ド・サドの伝記を「群像」に発表した。そして同じ年の十一月、サドの勉強補足その他の反省のため二度目の渡仏をしたが翌年帰国後は健康を害して入院した。昭和三十五年、彼が三十八歳の年の事である。

病気は胸。肋骨を六本も取除くという、六時間にも及ぶ大手術を受けたが、幸い約三年間の入院生活の後回復した。三十八年(四十一歳)退院後、少しずつ身体の回復に従って短篇を書き始めた。短篇集「哀歌」(昭・四〇・一〇・講談社・四十三歳)は回復後の三年間の短篇を手際よく纏めたもので十二の作品が収められている。その中の「再発」「男と九官鳥」「その前日」「四十歳の男」「大部屋」の五篇は直接病院を取材した私小説風のものであるが、著者がそのあとがきで洩らしている様に、著者の基督教における現在の立場を示そうと言う意図を持っているものの様である。

「四十歳の男」を少し解説すると、三度目の肺の手術を受ける男が手術の二週間前に妻に頼んで九官鳥を買って貰う。その鳥の眼を見ていたかったからである。或る角度から眺めるとその眼は冷たく、非人間的なものだが、別の角度から見ると哀しみをじっと湛たえた様な眼である。この鳥と同じような哀しみをたたえた眼を彼は自分の人生の背後に意識するようになって来ている。その眼は特にあの日の出来事以来彼をじっと見つめているような気がする。見つめているだけでなく、何かを自分に訴えているような気がする。そしてその眼とは、著者のあとがきによれば、踏絵の基督の眼をあらわしているのであるようだ。この様な凝視に会うという事はキリスト者として生きるという事のように思える。そしてあの日の出来事とは、妻以外の女との間に出来た胎児をおろした事を指しており、それは明らかに「罪」を意味している。そしてこの作者は更に罪はこの事自体よりも、その為に一つの波紋が二つになり二つの波紋が三つになり、皆が互に誤魔化し、合うようになってゆく事にあるのだとしている。結末で、「これからはすべてうまくいくわね」という妻の言葉に素直に同意出来ないもののあるのはこの為である。誤魔化しの生活がつづくだろうからである。夫婦間の、そして男と女の間に生まれる誤魔化しに鋭く焦点を当てた作品には他に「パロディ」（昭・三十二・群像）があつて好一對をなすものであるが、後ユーモラスな要素を加味して彼は「結婚」（昭・三十九・ロマン・ブックス）の様な作品も書いている。「大部屋」は処女作「アデンまで」の時述べた様な現在と回想とを切りつぎした構成になっている。内容は同じ病棟の富岡という患者のことを回想

風に書いたもので、この富岡さんが肺葉切除の手術を受ける。富岡さんには見舞客も殆んどなく、クリスチャンだとの噂さが流れる。牧師が見舞に来て帰ったあと、学生の村上君が富岡さんにつつかかる。「一本本当に神なんかあるんですか」そして、小児病室の子供達の病苦のことを例に出したりする。富岡さんは発熱して、気管支漏になる。富岡さんの眼の色をひそかに観察している私には彼にも又他人の不幸を願う色がある様に思える。富岡さんは祈っただろうか。私にはひそかに自分自身の助けを求めていなかったといえないと思われた。友人の八丁さんが手術。成功。富岡さんにその結果を聞かれて「気管支漏の疑いあり」とウソをつく。富岡さんの目が光り、唇のあたりにも、薄笑いがかんだ様に見えた、という話。テーマは、うわべはどうあるうと、人間には他人の不幸をよるこぶという、エゴイズムが巣くっているものだという事を簡潔な筆で鋭く追求したものである。主人公がクリスチャンであつたり、牧師が見舞に来たあとの「神の存在」だの「救い」だの「祈り」だのが出てくるところが、遠藤好みなので、これは既成の、形式的な、軽薄さ、偽善的なもの一切を鋭く臭ぎわけて、拒否しようとするのであつて、キリスト教そのものに反抗しようとかそれを否定しようとかするものでは勿論なく、より高次なものを欣求する精神より出たものである事は明白であろう。

あとにつづく「童話」「雑木林の病棟」「帰郷」「札の辻」「雲仙」「私のもの」の作品群の中で「童話」は大連を背景として幼時の回想を暗い色調で描いてみせたもので前述の如く「私のもの」と「船を見に行こう」（昭・三十五・小説中央公論）と同じ系列に属するもの

である。「帰郷」「札の辻」「雲仙」は共に私小説風の小説でありながら、題材的には踏絵や転びバテレンを取り上げ、転び者の苦しみや傷ついた歎きに心を寄せ、そこにイエスの心をうかがおうとする姿勢が見られる。この一貫したテーマは前述の病院ものからうけつがれたもので、これを集中的に約言すれば、イエスがユダに向って言われた「去れ、行って汝のなすことをなせ」の真意を忖度しようとする心から出ていると私には思われる。そしてこれは、神の沈黙、神の恩寵の問題として長篇「沈黙」に纏められる事になったのである。

「沈黙」は昭和四十一年三月、新潮社から出版された。文字通りの問題作であり、処女作以来のテーマを大きく纏め上げた点で正に代表作の名にそむかぬ佳作である。前述の如く昭和四十年刊行の短篇集「哀歌」はこの「沈黙」を理解する為には通読の必要があるだろう。素材とテーマとが共通しており、何よりも、その動機づけが、作者の心で結びつけられる秘密が、ここで生々しく語られているからである。

遠藤は、明るいもの、美しいもの、力強いものは書かないで、好んで暗い、汚ない、弱い、卑劣なものの中に、自分を見出し、そこに人間的なあなたか味を分ち合おうとする。そして彼の文学は、これ等陽の当るところに在るものの中に埋もれた、誤魔化されたものを鋭く、暗示的に摘発しようとする。カトリックをこの様な地点で解そうとする彼の立場は、私には仏教の他力教に近いものが感じられる。

それでは「沈黙」のテーマは何か。私はこの作品には二つの主張があると思う。その一つは、弱者の、背教者の姿を通しての作者の主張

である。この作品の主演の一人、キチジローの主張である。殉教者になれなかった弱者は生涯裏切者の烙印を押しつけねばならぬだろうかという問いである。そげんにまで耐えしのばなけりや、わしらはハライソに行かれんのじゃろか。デウスさまはわしらのような者は見棄てなさるのだから、という叫びである。私達は処女作「アデンマで」の黒人女のうめき声の中にまでその源流をさかのぼらせることが出来る。黄色人の哀愁を通して語られるテーマは、キチジローの系脈である。「白い人」の学生、生まれながらに決定的な心の傷を背負わされた、あの主人公も「海と毒薬」の勝呂助手や戸田助手も又同様であるだろう。遠藤がその暗い筆で書き綴った幼時の回想に登場する彼自身の姿も、悉くこれキチジローの変身である。（短篇「雲仙」にキチジローが出てくる）この作品で作者の血を最も多く分けられた分身は実にこのキチジローである。キチジローの中に己れを見出すというのが遠藤文学の基調であると言うべきである。

もう一つの主張は、勿論、転びバテレン、ロドリゴ神父の立場からなされる。主よ、あなたは今こそ沈黙を破るべきだ。もう黙っていてはいけぬ。あなたが正であり、善きものであり、愛の在存であることを証明し、あなたが厳としていることを、この地上と人間たちに明示するためにも何かを言わねばいけない、という叫びである。そしてこの沈黙に彼が挫折し、棄教し、踏み絵に足をかけた時

——その時、踏むがいいと銅版のあの人は司祭にむかって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの

痛さを分つため十字架を背負ったのだ。

十字架の基督をこの様に解し、この様な声を聞く立場は又キチジロの立場の様に、私には思える。

——「主よ。あなたがいつも沈黙していられるのを恨んでいました」

——「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」

——「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか」

——「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」

「沈黙」の意味である。そしてそれがユダに対するイエスの心である。ユダはこの場合、キチジロである。小説「沈黙」を神の存在を問うた作品だと言った批評家がある。まぎらわしい表現である。実在を問うとは、神は本当にいるのか、という問いであるらしいが、この小説は、神は本当にいるのかと問うてはなくて、何故沈黙しているのだと問うて、問いつめた神父の耳に、彼が進退きわまつて、キチジロと何等選ぶところのない弱者、愚物に過ぎない凡夫の身に己れを見出だした時に、「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのだ」というイエスの声が聞こえたという小説なのである。「神はあるか」という問いと、沈黙に耐えられぬ思いとは共に奇蹟を希う心であるが、奇蹟は終にあらわれない。

——あの人は沈黙していたのではなかった。たとえあの人は沈黙し

ていたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。

この意味深い言葉でこの小説が終るのであるが、あの人について語るという意味は何なのか。それは沈黙に挫折して棄教したロドリゴ、そしてキチジロやユダの中に、己れを見出さざるを得なかったロドリゴが、そのことを通じて、キリスト者として生き得たと悦べた事を指すと思われる。棄教者にも恩寵は働くといい主張にもつながるものである。この場合のキリスト者の意味と、親鸞の念仏者の意味とは甚だ似通ったものが感じられるが、これが遠藤の言う「私の今の立場」というものである。カソリックとしてプロテスタントイズムに近しいと思われると彼自身そのあとがきに述べているが、その意味で神学的批判があるところであろう。

テーマとしては尚一つ、日本人の精神的風土には遂にキリスト教は根をおろし得ないのではないかという疑問である。これは小説「火山」に於て既にあげつらわれたところであった。「日本人は今日まで、神の概念はもたなかったし、これからもてないだろう」「日本人は人間とは全く隔絶した神を考える能力をもっていない。日本人は人間を美化したり拡張したものを神とよぶ。人間とは同じ存在をもつものを神とよぶ。だがそれは教会の神ではない」という言葉しかし説得力に富むものであるとは思えないのであるが、どうであろう。微妙にして鋭い観察ではあるが、人間を美化して神とよぶというのは、祖先を神として祭り、乃木大将を乃木神社に祭るといふ事などを指すのであるか。

ただ、別に西洋文化と東洋文化との差違の様なものか述べられる。ロドリゴの棄教に際して、西洋は、信者を見殺しにするのも止むを得ない「正義」を守れと命じ、東洋精神は、正義を棄ててもよいから「殺人」は行うなと主張する。ロドリゴを通して、作者遠藤は東洋精神の側に立つもの様で、これも前述のカソリック神学からの批判のあるところに重なるものであろう。

#### 四、むすび

処女作「アデンまで」から「沈黙」までの解説を通して、私は、遠藤の文学の特異性や独自性とそしてそこに一貫する主題<sup>テーマ</sup>を追求して来たつもりである。そして日本人作家としては珍らしいカソリック作家として彼に大なる期待をいだくものである。

終りに一言したいのは、右の作品系列の他に遠藤にはユーモア小説の作品群のある事である。これは「火山」が発表された昭和三十四年に最初の新聞小説として朝日新聞に連載された「おバカさん」に始まるようである。後「私が棄てた女」（昭・三十八・主婦の友）「浮世風呂」（昭・三十九・日経新聞）「快男児・怪男児」（昭・四十三・講談社）などがこれに属する様であるが、その出来栄えや文学的価値について、私は疑問を持っている。譬えば「わたしが・棄てた・女」のカバーの帯紙に、作者の言葉として「私は一人の聖女を描きたいと思つた。われわれと縁遠い聖女ではない。朝の電車や午後の街の中で、横を通りすぎる人々にじる聖だ。その聖女の名を森田ミツという

」とあるが、仲々ユーモラスな軽やかな紹介文で、この様な聖女が成程この作品に描かれてはいるのだが、私には何としても物足りない。作品の終りの方では、短篇「雑木林の病棟」と同じ素材が使われている様だが、作品から受ける感動という点で問題にならない。文芸性の上で、「棄てた女」の方がずっと価値低いものと、私には受け取れるのだ。私がこの拙稿で取上げた作品系列に対して、このユーモア小説の一群が、遠藤文学の一つの新しい境地を示してくれるものであったり、その主題が更に新しく生かされて来た様なものであってほしいのだが、遺憾ながら近作「快男児・怪男児」に於てもそれが認められなかった。「狐狸庵随筆」の様なもの、人生相談式の「まごころ問答」（昭・四十二・コダマプレス社）から、最近では、テレビに「こりゃ・あかんわ」の番組に出て、芸能人達を裸にする、意地悪ムードでありながら、案外マスコミにも乗っている遠藤であるが、彼が「沈黙」からどう動いてゆくのか大きな関心の持たれる事である（完）

——昭・四三・九・二〇——